

保老み通信

第95号

2022年2月28日

社会福祉法人

坂井輪会

発行元 〒950-2035 新潟県新潟市西区新通4734 TEL 025-269-1600 FAX 025-269-1571



祈願 疫病退散!



1・2年目職員 法人研修

介護保険制度20年

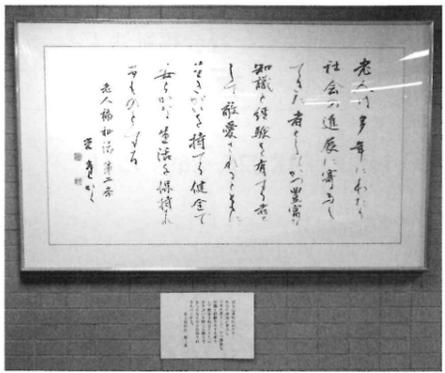
介護保険制度が始まって20年。

昨年11月17日穂波の里地域交流スペースにて、坂井輪会の成り立ちや理念、これまでの歩みについて、法人前理事長上杉あさ子氏よりお話を聞く機会が設けられました。



講師の近況報告から始まり、①老人福祉法と介護保険法の違い ②穂波の里の歩みと制度の変遷

③援助をめぐる④地域とのかわり、最後は新旧職員への期待で締めくくられました。



玄関左側に法人理念が掲げられています

この学習会を終え、1・2年目職員より感想や今後に活かしたいことについて研修報告が提出されましたので、全文より抜粋したほんの一部分ではありますが、皆様にもお伝えしたいと思えます。

特別養護老人ホーム

○「安心のよりどころ福祉の町づくり」を念頭に地域に向く活動、介護保険の隙間を埋める活動で少しでも貢献できる事があるなら協力していきたい。「人権尊重の援助」を自分の中でしっかり噛み砕き一人一人の入居者に対して日々の援助を行っていきます。

○拘束については、前職の有料老人ホームでは、センサーやベッド柵とり囲みが当たり前だったのに、穂波の里に来てから人権尊重の援助に感心いたしました。介護者にとっての施設ではなく、入居者の生活の場なんだと実感しています。地域との関わりについては、昨年10月の入職なので、ご家族やボランティアの方が自由に入入りする場面を知りません。

○利用者の安全を守るという名目で人権への意識が薄れていたと思う。外へ出ようとされた利用会になりました。

栄養課

○最初に学習会があると聞いた時は「厨房なのに出席する必要はあるのか？」とそんな風に思いました。しかし、学習会が始まるとそんな考えはすぐに打ち消され、上杉さんの通る声とお話の内容、何よりもこやかな表情には人柄がとも良く表れていて、気づくと話に聞き入っていました。

○施設において措置の時代とは、市に依頼してから入居先を決めていたが、2000年4月から入居者が直接申し込むように制度が変わったので、行政が施設待機者がどのくらいいるのか把握できなくなると、制度がどういうふうにならなるといったのが勉強になりました。申し込む側は大変になってしまったと思えました。

○穂波の里の歴史や歩みを知り、地域の人々を大切にして、私の部署の調理業務に生かしていきたいと思えます。

者の話を聴いて、普通はその後錠をかけるなどの対策を強化しそうだが、それでも理念を知らぬいて人権を守っている姿勢は驚嘆に値します。自分ももう一度自身のケアをふりかえってしっかりと理念に合う介護を行っていききたいと思う。

○援助する中で、相手の気持ちに寄り添い、相手の立場に立って考え接していけるように人権尊重の基本を次の方々へ伝えていきたいと思えます。

○今回の学習会で開設までの苦労、地域の方々の施設への期待と意思を知る事ができました。また、「自分も入りたいと思えるような施設に」という言葉を聞いて、最初は入居者一人一人に寄り添った援助をしたいと思っていたものの、一年経ち、業務に追われ、職員の都合を優先してしまっていたなど、反省しました。今後、初心を忘れず日々の援助を一つ一つ丁寧にやっていきたいと思いました。

○日々のルーティンワークで一杯になってしまい自分だったらどうしてほしいのか考えられない場面や、本当はこうしてあげたいけどできない場面がよくあります。忙しい中でも自分が入

医務室

○今一度、自分の役割、そして施設(特養)は生活の場であり、入居されている方は、生活の場

たんぽぽ広場

音楽に癒され…

笑顔のひと時

12月16日、たんぽぽ広場ではチエロとフルートの演奏会が行われました。いつもボランティアをしてくださっている方とそのお仲間の方3名で、クリスマスにちなんだ曲を中心に演奏してくださいました。30分程でしたが、コロナ禍にあつて何かと緊張感をもって生活されている参加者の皆さんにとって、久しぶりの美しいメロディーに癒され勇気づけられ、笑顔が溢れた時間となりました。一日も早く以前のようによく多くの地域の皆さんとこの温かな時間を共有できる日が来る事を願ってやみません。

(担当 横川)



りたいと思えるような援助ができるよう努力していこうと思えました。

居宅介護支援事業所

○上杉様のお話しの中で介護保険制度になつてから、「ケアプラン」を基に支援を行う事となったが、「ケアプランの中に利用者の生活の場という意識が抜けがちになつている」という言葉があり、改めて意識してケアプラン作成を行いたいと思えました。

○穂波の里は措置の時代から人権の尊重を掲げていたこと、身体拘束をせず、利用者をちゃん付けしないという方針だったと聞き、他の施設とは全く異なる施設だと感じました。上杉氏の介護保険のすきまを埋める。穂波の里の歴史を受け継ぎ、地域の方々と一緒に地域の課題を考え、解決していくこと、そのために国や自治体へ発信していく役目がある、という言葉がとても印象的でした。

○特に一坪運動で地域の方の理解や信頼を得て協力いただくまでの過程では、相当なご苦労があったと想像できます。ご利用者やご家族の要望や意向を傾聴し一緒に考えていく中で、地域の課題として捉える視点を持

(文責 梁取)

ち、支援に活かせるようにしたいと思いました。

地域包括支援センター

○日々の業務の中で、介護予防教室や相談業務などで直接、住民と地域にかかわることができず。対象となる方は、多く長くの知識や経験をもち、社会に貢献されてきた方であるということとを忘れず接していきたいと思えました。また一人一人の課題について考えていく中で、地域課題について地域の方と一緒に考えていけるよう、地域で生活されているということをお頭に置いて取り組みたいと思えました。

○穂波の里では、開設時より、拘束をしない、玄関の鍵をかけるなど人権を尊重した関わりを行っており、地域においてもその人らしい生活が送れるように、安心して生活ができる場所をつくれるように、支援をしていきたいと感じました。「三出し支援が始まるきっかけの話を聞き、現場の声から地域の課題を見つめ、解決方法を探るため、地域ケア会議を通して地域のひとと一緒に考え、連携を図っていくことの必要性を感じました。○私自身、社会に出て働き始めたころは、すでに、介護保険制度

2021年度 事例報告集より

コロナ禍でも楽しく
若々しく生きる

新潟名湯ウォークラリーの取り組み

デイサービスたんぼぼ寺尾上
管理者 石川 麻美
はじめに 新型コロナウイルスの感染拡大にともない、ご利用者から、どこにも出掛けられず、日々の楽しみがなくなつたとのお話がよく聞かれるようになりました。通常実施しているスクエアステップ又は体しゃっきり体操の運動プログラムに加え、コロナ禍でも楽しみをもっていたいただき、運動への意欲向上を図るにはどうしたらいいかを考え実施した「新潟名湯ウォークラリー」と題した取り組みを報告します。

経過 1月 少しでも旅行気分を味わい、楽しみをもって運動に取り組んでいただけるように、と発案した「新潟名湯ウォークラリー」を開始。当初ウォークラリーという言葉に馴染みがなく参加に消極的なご利用者もおられましたが「若い頃ウォークラリーに参加した、懐かしい」「一緒にやってみようよ」等ご利用者同士の働きかけもあり、全ての方に参加して

ただけました。
4月 スクエアステップ・体しゃっきり体操クラスの累計第1〜3位のご利用者をランキングしてフロア内に掲示しました。
7月 広報誌にランキング上位者のインタビュー記事を掲載。上位入賞したお気持ちや、好成績を残せた秘訣等について語っていただきました。

10月 スクエアステップクラスで、初めてゴールを達成されたご利用者に表彰式を行いました。賞状と記念品(新潟の温泉地の入浴剤)を贈呈し、職員と他ご利用者の皆様でお祝いしました。達成されたご利用者は「賞状なんでもらったのいつぶりだろう」「自分でもよくがんばったと思う」と達成の喜びを語って下さいました。
11月 初達成されたご利用者の記事を広報誌に掲載。別の曜日のご



新潟名湯ウォークラリーチャレンジシート

月	一日の歩数	合計の歩数	月	一日の歩数	合計の歩数
日	歩	歩	日	歩	歩
日	歩	歩	日	歩	歩
日	歩	歩	日	歩	歩
日	歩	歩	日	歩	歩
日	歩	歩	日	歩	歩

地域包括支援センター坂井輪

坂井東・新通つばさ・新通小
認知症サポーター
養成講座を終えて

昨年10月21日坂井東小学校、11月18日新通つばさ小学校、今年1月13日新通小学校といずれも4年生を対象に実施しました。

4年生は総合学習で福祉をテーマに学習しており「福祉とは何か」を始め、障がい者・高齢者の暮らしを知り、安心して生活するための工夫や自分たちができることについて学んでいます。その学習の一環として、高齢者になると増加する「認知症」についても学び、地域で温かく見守ることができるとサポーターとなつてもらえるよう、講座を受けていただきました。

冒頭で「サポーターということどんなイメージがありますか?」と質問していますが「サポートする人」「生活支援をする人」として、4年生とは思えない返答があり、私の方が面食らつてしまいました。講師(キャラバン・メイト)は包括職員以外に学校近隣に施設がある、サービス付高齢者向け住宅「笑日和坂井」井上様、「愛の家グ

利用者よりその方に会ってみたいと希望があり、ご本人に了解を得て交流の機会を設けました。
考察 スクエアステップクラスでは、ウォークラリー開始時「今日何歩だった?」「次は〇〇温泉まで行けるかな」等歩数への関心が見受けられました。ウォークラリー実施により利用時の歩数が2倍以上に増加したご利用者もあられた。①運動への意欲増加につながった。体しゃっきり体操クラスでも「また温泉に行きたいから、デイを休まず健康でいたいね」等の声がかかれ ②健康への関心の増加につながった。両クラスとも多くのご利用者に参加していただけたことで ③ご利用者内に競争意識が芽生え、意欲を持って取り組んでいただけたものと考えています。チャレンジシートについては職員が歩数や回数を管理す

「新通つばさ小学校」よりいただいたお礼の手紙を一部紹介いたします

- ・お話を聞いてわかったことは二つあります。一つ目は、認知症になるとのうさいぼうが一日にたくさんへってしまうことです。二つ目は、きおくしようがいと物忘れのちがいです。
- ・認知症のことを聞いてのうのはたらきがへること、のうが小さくなることとのうさいぼうがへることが聞いて分かりました。
- ・もし、だれかがにん知しようになつても、いざいときづかないのかなと思えました。すごくいいবেনきようができました。



・認知症をかかえている人のかか

るのではなく、自主記入とするところで、主体性をもって取り組んでいただけるよう配慮しました。特にスクエアステップクラスでは累計の歩数を計算して記入するため「計算なんて久しぶりだから頭を使うわ」等のお話が聞かれ、運動面だけでなく脳活性化の一助にもなつたと感じました。

情報発信の面ではランキング掲示、広報誌での紹介等を行ったことで、運動の意欲向上へつながつたものと考えています。加えてご利用者の担当ケアマネージャーからも「この3位のA様って〇〇様ですか?すごいですね」「広報誌見ました、インタビューしてもらつてうれしかったとご本人からもお聞きしました」等ご利用者の日々の頑張りをより具体的に報告することができたと感じました。

おわりに いままで続くか分からないこのウイズコロナの時代だからこそ私達に何ができるのかを考え、日々摸索していくことが重要となります。今後もご利用者ひとりひとりが何を思い、何を感じているかを職員がしっかりと把握し、そこから得たものを支援やプログラムに反映させることができるよう、日々努力していきたいです。

- ・分かりやすいげきや、えいぞうなど見させてくれてありがとうございます。
- ・にんちしようという病気は、たいへんな病気なんだなと思えました。それでもやさしくせつしてあげることやわすれないことが大切なんだなと思えました。分かりやすかつたです。これからもやさしさをわすれないでえがおをふやしていってください。おうえんしています!
- ・にんちしようになると、どんなしようじようがでるか、画面などで説明してくれたので、よく分かりました。家の人にも教えてあげたいと思えました。
- ・にんちしようのことがよく分かりました。おばあちゃんがにんちしようなのでよくたてるといいです。にんちしようがたいへんなことが分かりました。
- ・しようがいしゃの人について、とてもよく分かりました。にんちしようについてもよく分かりました。もし、ふなやまおじいちゃん(劇中人物)みたいな人がいたら、やさしく声をかけて、たすけてあげたいです。

決して高齢者だけが見守られる立場でなく、お互いに地域の人に見守られている「お互い様関係」の中で、地域全体で支え合う意識の醸成ができればと思つています。これからも、誰もが安心して暮らせる町づくりにつながるお手伝いをしていきたいと思つています。

(保健師 佐藤 裕子)

特養 道場山穂波の里

オンライン
交流会



新通小学校の児童とは、毎年施設見学や催しを通して交流がありました。新型コロナウイルス感染症拡大により、残念ながら交流を中止しておりましたが、西区社会福祉協議会様、新通小学校様より「今できることを通して、児童と入居者の皆さんとの交流を図りたい」との想いをうけ、オンライン（Zoom）交流の実現に至りました。

まず、11月にオンラインでの施設見学として、入浴のリフト、電動ベッドの使用方法など施設内の設備について説明を行い、入居者の生活の様子や施設の紹介を行いました。その後オンラインでのリハーサルを行った上で、当日を迎えました。



お互い初めての試みでしたが、歌やハーモニカ演奏、児童の手作りボードを使用したじゃんけんゲームや質問コーナーなど交流を行いました。オンラインという限られた状況の中「どうすれば入居者の皆さんにわかりやすく伝わるか、楽しんでもらえるか」など児童が工夫を凝らし、わかりやすく、楽しめる内容や企画が考えられていました。画面を通して、手拍子をしながら歌を口ずさんだり、ジャンケンゲーム

でお互いに盛り上がり、喜び合ったり、児童からの質問では嬉しそうに答える様子もあり、皆さんの笑顔が印象的でした。最後は手作りの折り紙やコースターなどのプレゼントがあり、「ありがとう」の歌を披露していただきました。交流会後の様子を見ていても、大変好評で、皆さん



はこの日の交流を本当に喜ばれていました。「喜んでほしい」「楽しんでほしい」という思いや温かい心が、画面越しで場所は離れていても伝わることを実感しました。

感染拡大の中、当たり前のようにできていた地域との繋がりがや交流が難しい日々が続いていますが、オンラインという形での交流は、今後も継続していきたいと思えます。交流があった児童が、登下校で道場山穂波の里を通る際に、手を振り挨拶をしてくれるなど、繋がりは続いています。働く姿を間近で見、交流会や施設での職場体験を通し、高齢者への理解を深め、成長され、介護を学ぶ学生として再び戻ってきてくれる日を、一日でも早く取り戻せるように願っております。

（相談員 貝瀬芳博）